

## 「締切日」

(2020)

先日NHKの「ラジオ深夜便」(午前四時〜)を聴いておりましたら、ある作家さんのインタビューで「物を書く動機は何ですか・・・？」との質問に、きっぱり「締切り日です!」との返答でした。これには僕もハツとして、改めて会社生活を引退後の「毎日が日曜日生活」の自分の墮落振りを反省させられた様な気がしました。そう言えば会社に居る頃は、全ての事が「締切日」の為の作業で「締切日」に突き動かされ続け、それによる一定の成果も得ていたのだなあ・・・とつくづく思い出しました。

そういえば、高校・大学時代から社会人になってからも十数年間。福岡県・山口県の「県美術展」に絵を出品していた時の事、そして大学時代の「課題設計」の提出の時、中でも最後の「卒業設計」をまとめていた時の事、そして忘れられないのは40代に差し掛かる直前に決行した僕の「絵画展」の開催・・・など等、締切日を目の前にしながらの最後の奮闘を今でも思い出します。最後の一瞬そして、最後の数日間、何かに取りつかれた様な気分の高揚と同時に、今から考えれば、よくぞこんな仕事・・・と思われるような、今の言葉でいえば「ゾーン」に入っていたかのような不思議な経験でした。

そのために必要なのはまずは「ストレス」(締め切日)そして、これによる適度の緊張がアドレナリンの放出を促し、愈々戦闘態勢に入り、次に

これ鎮める為、ストレス抵抗ホルモンである覚醒物質（αエンドルフィン）が放出され、愈々究極の集中状態が作られる・・・という事らしいです。

ここ最近の事ですが一番実感するのが僕の「俳句」生活の事です。何十年にもわたりひとりで書き溜めた僕の「俳句集」ですが、これがもう約2500句にも及び、これを何とか分冊し、刊行でもしようかとも考えますが何分にもその目的と動機・締切日が曖昧な為、「いつか又、その内に・・・」の連続でこの齢になってしまいました。

そこで先ずは、取り敢えずは家で、自分でプリントコピーして、自分で簡易製本でもしてみようと、製本機「綴じたクン」をアマゾンで購入し、自分でやってみたりもしています。

A4コピー紙で約350枚の大判となりました。最大のネックは、印刷されたものを改めて見返すと、何故か不思議に自分なりの気付き・訂正箇所があちこち見つかり、その度にパソコン原稿を訂正するのですがこれが将に、締切日が無い為の「無限地獄」の連続なのです。

閑話休題、定年後何年もが経過し、「毎日が日曜日生活」を何とか打破しようとして、先々月から、市が行っている「俳句教室」に入りました。改めて自分に何らかの「義務・締切日・・・」を課しての生活改善に挑んでみようと思ったのです。

お陰様で毎月の課題句に対する僅か五句ですが、締切日に向けての修

行・荒行・苦行・・・は、やりがいがあります。

残念ながら未だ、「悟り」「ゾーン」の域には達しませんが、その内・・・

偶々その講師の方が、僕と同期入社（広大建築）の奥様ということもあつて気軽に参加しています。俳句会の前日迄に課題の自作を五句投句メールします、何日まで・・・というのが作句する上でも大きな原動力になります。

僅か五句ですが、句会当日十数人の投句約数十句がランダム・無記名で公表されます（この表をパソコンで纏めているのは講師の「ご主人です」、皆で遠慮なくお互いに感想を述べ合う・・・といった感じです。

## 二月投句「春泥」

一 春泥の中より錆びし庭缺

はさみ

二 山門を抜け春泥の娑婆に立つ

しゃば

三 音弾む考の桐下駄 雪解道

ちち

ゆきげ

四 鯽あら煮 頭骨を穿り食べ尽す

ぶり

ほじ

五 雪催い中也の歌なぞ口遊ぶ

ゆきもち

くちづき

牡丹雪中也の歌が聴こえます

ほじ

いただ

兎煮を穿りしやぶりにて頂けり

春泥を生きし青菜の苦味かな

ほじ

兎煮を穿りいのちを食へ尽くす

春泥の荒海となり今朝の庭

春泥に古き切り株現われし

あふ

春泥の溢る未明の庭になり

まゆはけおもと

母の忌に飾る眉刷毛万年青なり



眉刷毛万年青

天窓の満天星の聖夜かな

掛け時計雪の音して目覚めけり

組板の花梨頑固や刃もたたぬ

そり

冬銀河橋の航跡の揺れ動く

一月投句「初湯」

一、初湯せし妻の湯の香を抱き寄せる

二、初風呂や湯加減を問う妣なりき

ういぢ

三、初菑古き家並の蠢けり

四、風花に光さざめく竹林

ひえつきぶし

五、稗搗節一人で唸る初湯かな

たかむら

風花や篁光りさざめけり

紅薄きバイトの巫女の屠蘇を受く

我が庭の鬼門守りし藪柑子

風花や木の芽光りさざめけり

淑氣満つ未明の熱きココアかな

左手のピアノ初湯に聴こえくる

朝風呂に響くピアノの淑氣かな

初風呂や「勝つて来るぞ」を唄いなむ

初日見る慶応二年の鳥居越し

初風呂の柚子の淑氣に浸りけり

初風呂に袖子放り投げ年迎え  
洋バスに寝て綾香聴く初湯かな  
寮に残り大浴場の初湯かな

琺瑯の洋式バスの初湯かな

あした

薄紅の妻の屠蘇受く大旦

藪椿海へと続く暗き道

椿道垣間に浪の匂いする

潮風の匂い残れる椿道

無限列車行くや遙かな枯れ木星

十二月投句「着膨れ」

やうど

一着膨れて刃抱えて曠野行く

二着膨れてお手々つないで老いにけり

三着老い先を守る葉陰の藪柑子

す

妻は拗ね銀杏黄落しきりなり

さざんか

あた

た

山茶花の散り敷く辺り陽の溜まる

うず

書架見れば若き日疼く憂国忌

妻は拗ねす 燃える満天星紅葉かな

妻拗ねて満天星躑躅燃え盛るどうだんつつじ

妻は拗ね屈んで確かむ藪柑子す

老夫婦守りて静か藪柑子

口吸いの如く熟柿を吸いにけりじゅくし

大寒を告げる護国寺朝太鼓

万両の影に寄り添う藪柑子

翳含む一輪だけの冬さうび

着膨れし我を無視する迷い猫

白椿 訪う人待ちて咲き続く

十一月投句「冬めく」

一冬めける古代の風やトロイ城

二十和田湖の乙女の裸像冬めける

逝きし友 日がな思へば初時雨

爽秋や「二十歳のエチユード」繚けりらや

庭陰の確かなる位置石路咲けり

十和田湖の乙女の肌や冬めける  
砂塵舞うトロイ遺跡や暮れの秋  
冬めくや竹刀一闪振り下ろす  
変わりなき庭の片影石路の花  
浜菊は同じ人見て咲き並ぶ  
冬めきて背筋を伸ばし竹刀振る  
秀明菊想いそれぞれ秘めて咲く

一〇月投句（文化の日）

一懐かしき人の計報や 文化の日  
ニ核兵器世界に溢れ文化の日  
ニ風狂の 桜一輪返り花  
ニ忘れ花会いたき人の来る気配  
ニ千冊の建築誌捨て秋涼し

帰り花二つ三つ咲いて 我を呼ぶ  
街見ゆる高空を占め忘れ花  
文化の日妻の手造りプリンの香  
文化の日の妻の手造りパン焼ける



文化の日ジャポニカ百科処分する  
迷い猫の眼光優し秋の暮  
秋深し居間の絨毯敷き替える  
孫と遊ぶ200mの向こう文化の日  
文化の日妻の味噌汁具沢山  
リモートで孫と勉強文化の日  
文化の日 街には生活困窮者  
正義より強き者勝つ文化の日

九月投句（流れ星・流星）

なきもり

一防人の壺岐に星降る物語  
二夜這い星壺岐の防人顔上げる  
三流れ星 行方は佐渡の辺りかな  
四流星や人の世の事 塵の如  
五星流る 百億年の夢語り

ちり　　い　　と

防人の魂還る夜這い星

夜這い星 山の端越しに消えにけり

流れ星 行方は佐渡の辺りらし  
星流る 百億年のものがたり  
防人の島に星飛ぶ話かな

八月投句

一揚げ花火 遙か海峡 空白む  
へ大花火終えた海よりゴジラ来る  
いコロナ禍に禱りの花火 高空に  
や引き波の音して手花火消えにけり  
い手花火の果てて記憶の独楽廻る

遠花火 窓に寂しき風届く  
遠花火 隣町より山超えて  
天窓を開けて港の大花火  
單身寮 湖の彼方の揚げ花火  
一人居の背中震わす遠花火

七月投句(梅雨)

へコロナ禍に喰う 最上級の鰻飯 うなぎめし

へ梅雨空を切り裂く へりの大轟音

はむら

い雨上がり グリオサの焰 燃ゆ

や超新星爆発 でで虫走り出す

い梅雨冷えの深夜 綾香の絶唱聴く



梅雨冷えの深夜バツハのトツカータ

梅雨冷えや深夜のココアでピアフ聴く

十万円で乗り切れコロナと暴れ梅雨

孫遊ぶZOOMの向こうも梅雨に入る

梅雨晴や孫がトイレで初ウンチ

無観客で阪神連敗 梅雨の闇

自転車に乗れたと動画梅雨晴れる

六月度投句

一 若き僧の いのちの講話若葉窓

はにゅう おや

父母逝きて埴生の小屋に夕焼雲

のこ

はだらゆき

母遺す焚火の跡に斑雪

とも

螢袋灯りふるさと暮れにけり

ト。プカピの千年の丘 大夕焼



この中では、「螢袋・・・」に多くの票が集まりました。

僕自身は月並みの句だとは思っていたのですが・・・

僕としてはそれよりも「母遺す・・・」に圧倒的な思い入れがあったのですが・・・（昨年暮れに百才の母が老衰で亡くなった）母が以前、庭で焚火するのが好きだったのを思い出し、今その焚火跡にうつすらと雪が降り、焚火跡に今でも残り火があるかのように雪が斑状に融けてい

る・・・

そして七月投句（課題「梅雨明け」）は

何故か「超新星・・・」が多くの票が集まり、（現代っ子のような若さを感じる・・・）等と、全員僕より若いオジさんオバさんたちに褒められました、

僕としてはそれよりも「梅雨冷え・・・」の句に大いに思い入れがあったのですが・・・平原綾香のジュピター絶唱・・・の凄さをついに誰にも分かってもらえませんでした。

未だ僅かの俳句会参加ですが、これを機会に色々な方々との交流・違った意見や感覚に接する大事さを学び、一人の自分の中に閉じこもらない大事さをこの齢にして教わりました。